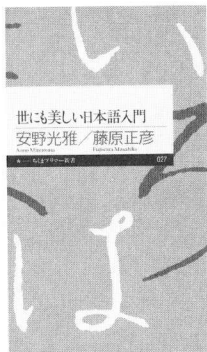


『世にも美しい日本語入門』

安野光雅
藤原正彦
〈ちくまプリマー新書〉



安野光雅は藤原正彦の小学校時代の図画工作の先生です。時を隔てて再会した師弟が美しい日本語について語り合っています。画家と数学者の本棚は全く異なる本で埋められているはずなのに、美しい日本語を紹介するために両者が選んだ本は驚くほどよく似ていたといえます。その本の一覧は巻末で見ることができます。ここでは、日本語の語彙の多さや翻訳語のすばらしさについて述べたところを見てみましょう。(二〇〇六年刊)

* * *

藤原 シェークスピアは、四万語を駆使したと言われていました。すごいと思うけれど、しかし日本語というのは中学生用の国語辞典を見たって五万語くらい出ています。広辞苑は二十三万語です。

★森鷗外などは、数十万語は使えたのではないのでしょうか。『即興詩人』は私にとつ

て、英語の本を読むよりも難しい。初めて見る単語が一ページに十も出てきます。漢字だから想像がだいたいつくのですが。鷗外は五歳で論語の素読を始め、七歳から津和野の藩校である養老館で四書五経を勉強したわけですが、すごいですね。漢詩の勉強は、東大医学部在学中も続けているのだから、年季が入っている。シェークスピアの十倍の語彙は使いこなせたのではないのでしょうか。日本語の言語としての豊かさは、呆れるほどです。漢語に大和言葉に、さらにいろいろな言葉が入ってきています。漢字は組み合わせればいくらでも新語を造れます。造語能力は世界一でしょう。

ある調査によると、英語とかフランス語とかスペイン語は、千語覚えていれば八〇%わかる。ところが日本語の場合、同じ八〇%わかるために五千語知らないとわからないらしい。では、九五%わかるためにはどれくらいかという、さつき言つた三か国語では五千語だということです。ところが日本語は、二万二千語知らないとわからないという。欧米に比べて、五倍ほどの言語を用いているということなんです。

なぜ、言語量が多いかというと、たとえば、車に関してだけで、「空車」「駐車」「停車」「対向車」とか、いろいろあります。これらに対応する英単語はない。「対向車」なんて、「逆の方向の路線をこちらに走ってくる車」と言うほかない。

日本はほとんど造語で言語を豊かにしてしまふ。そして、それらを片っ端から駆使するわけですから、天下第一品の言語です。

安野 新しい概念が生まれると、それを言い表す新しい言葉を用意しなければなら

安野光雅 一九二六年生まれ。画家、絵本作家、エッセイスト。画家・絵本作家として国際アンデルセン賞など多数受賞。著書に『ふしぎなえ』『旅の絵本』など。
藤原正彦 一九四三年生まれ。数学者、エッセイスト。数学者らしい論理的視点と日本文化を愛する情緒的観点による作品で知られる。著書に『若き数学者のアメリカ』『国家の品格』など。

★シェークスピア 一五六四〜一六一六年。英国の劇作家、詩人。

★森鷗外 一八六二〜一九二二年。作家、翻訳家、陸軍軍医。『即興詩人』は、デンマークのアンデルセンの長編小説を文語体で翻訳した作品。

★四書五経 儒教で重要とされる四書と五経の総称。

★漢語 古い時代に中国語から借用された漢字の音からなる語。

★大和言葉 日本固有の言葉。

なくならず。数学でも、日本語にはなかった概念規定が必要になるでしょう。

藤原 そうです。ただ、本質的でないことを言語化してしまうことが時々あります。そういうのは、美しい理論に登場して役割を果たすということがないんです。

安野 そうなんですか。

藤原 したがって、自然に淘汰たうたされてしまう。本質をピチツとついた、簡潔な言葉が生き残ることになるんです。

安野 以前、確率かくりつを子どもにわからせようとして、「確からしさ」と言ったことがありました。ある程度普及ふきゅうしたらしいですね。でも、本質的ではなかったから、淘汰される運命にありました。言葉をやさしく言い換えてみても、確率の考え方のものがやさしくなるわけではないですから。数学に限らず、実体の方は変わらないのに、言葉を換えてみると言う例があります。強姦ごうかんと言わずに暴行ぼうこうと言い表すなんて、逃げていて卑怯ひきょうだと思います。

藤原 そうですねえ。明治のころは「民主主義」とか「哲学」とか、「国際」「科学」「思想」「概念」「解剖」「社会」とか実にすばらしい造語ぞうごを用意しました。「腺せん」とか「臍すい」なんていう字まで創作してしまっただけから中国などに向けての言葉の輸出になっっちゃった。

安野 多少自慢じまんめいて言うのと、新しい概念に拮抗きつこうするだけの考え方が、日本には一応あった。だから造語もできた……。

藤原 しかも本質的に、しかも美しく翻訳ほんやくしました。「哲学」なんて見事みごとですよ。

安野 後から生まれたわたしは「哲学」とか、「抽象」などという言葉は昔からあったものだと思います、それを生み出す苦心くしんなどには思いおもに至いたらなかったんです。★西周にしあまねが造語したんです。

藤原 安野先生と津和野つわので同郷の……西周。

安野 そうなんです。津和野で同郷というのは嬉しいですね。あの人は一八六二年、三十三歳のときにオランダのライデンに留学していましたが、江戸文化を背景にした新鮮しんせんで対等な目で、西欧の文化文明にふれることができたのだらうと思います。調べてみると、「主観」「客観」「本能」「概念」「観念」「帰納きくたう」「演繹えんえき」「命題めいだい」「肯定こうてい」「否定」「理性」「悟性ごせい」「現象げんしょう」「知覚ちかく」「感覚かくかく」「総合」「分解」など、西周にはたくさんさんの造語がありました。

藤原 西周や森鷗外もりおうがいの学んだ津和野の藩校はんこうは、よほどすごかったんですね。いまの人じゃとても無理ですよ。江戸の文化が、すごく高かったということでもありますね。いま西周がいたら、アイデンティティ、トラウマ、アクセス、インフォームドコンセントなど、見事に漢語かんごにしてくれるのに……。

55

考こうしてみよみよ

1 1～17行に書かれている数字を取り上げ、表やグラフにまとめてみましょう。

45

★西周 一八二九～一八九七年。啓蒙思想家、哲学者。

40

35